

新科目「福祉からみた生活」実践報告

～福祉活動の実践の場での経験を通じて主体としての意識を醸成する～

家庭科 田中友紀子・福祉科 熊倉悠貴・鶴ヶ島市社会福祉協議会 牧野郁子

筑波大学附属坂戸高等学校では、平成23年度入学生から新教育課程が始まるにあたり、生活・人間科学科目群においても設置科目の見直しを行った。福祉的な視点を持ちながら、自らが生活をつくっていく主体者として自覚をもてる生徒の育成を目標に加え、選択者全員が福祉を学べる科目を開発した。そこで今年度新たに始まった3年次科目「福祉からみた生活」の実践内容をまとめ、次年度以降における科目の充実に生かしたい。

キーワード：地域福祉活動 主体形成 教養としての福祉 ニーズ 福祉問題の発見

1. はじめに（設置の背景）

新教育課程において、生活・人間科学科目群の生徒は全員が2年次・3年次と連続して福祉を学ぶように科目を設置した。2年次では「福祉入門」を、3年次では本科目「福祉からみた生活」を科目群指定科目としている。この科目を設置した背景としては、これまでの本校における福祉科目の実践から、特に福祉の科目を中心に選択していない生活人間科目群の生徒の中にはもちろんのこと、福祉の科目を中心に選択している生徒の中にも、理解や態度の育成・行動変容の面で生徒はどこか他人事として福祉をとらえているように見受けられることが課題のひとつであった。本校の福祉科目が目指すのは、専門職養成ではない。これから生きてく一人の人間として福祉を学んでほしいという教養としての福祉を学ぶことを目指している。そのため、こうした生徒の意識を改革したいと考えた。

2年次の「福祉入門」では、生徒の感想文分析や質問紙調査の結果から、福祉を身近に感じさせることについては一定の効果があったことがわかった。しかし、身近に感じさせることができても実践できる人材を育成するということはかなりハードルが高いとされている。そこで、座学が中心であった2年次の「福祉入門」を発展させ、3年次の「福祉からみた生活」では、地域で活躍する実践者と出会い、触れ合うことを通じて学びをより深め、地域の（福祉）活動の中で活躍できる態度を育てるということを「福祉からみた生活」の大きなテーマとした。

「福祉からみた生活」は、2年次の福祉科目と同様に学校設定科目である。「福祉入門」と同じように「生活

と「福祉」を結びつけ、福祉を身近なもの・自分と関係のあるものとして主体的に学ばせられるようにとの考えから、担当教員は家庭科の教員、福祉科の教員がチームティーチング（TT）で授業を行うものとして承認されている。

2. 学習目標の設定

前述したように、3年次「福祉からみた生活」は、2年次「福祉入門」に続き学習していく科目である。

「福祉入門」では、次のように4つの学習ステップを設定した。

- ①社会福祉の理念
- ②生活における福祉問題の構造
- ③身の回りにある福祉問題
- ④社会福祉（地域福祉）の主体形成

「福祉からみた生活」では、「福祉入門」において特に到達することが難しいと考えた「④社会福祉・地域福祉の主体形成」を学習の中心に据えることとした。

本科目の大きな目標は、「福祉社会の一員としての自覚をもち、地域福祉のインフォーマルな資源となって地域の福祉を支える。ひとりひとりが自分らしく生活する・地域で暮らすことができるように、皆で支え合っていく。そのひとりとして関わっていくことができる段階を目指す。」である。

そして、評価と結びつけた具体的な目標としては、1）地域の福祉課題について積極的に知り、ニーズについて認識し、考察することができる、2）調べたこと・考えたことを他者にわかりやすく説明・発表することができる、3）調べたこと・考えたことを活かし、実際に活動

することができる。活動できなかった場合は、その原因を考えることができる。の3つとした。

3. 授業実践の実際 【資料①】

＜1学期＞

1学期はグループでの活動を始めるにあたり、講義やゲストスピーカーの講話を通じて地域福祉活動について理解できるよう活動のきっかけづくりをした。

・「福祉からみた生活」イントロダクション

本科目は、学校設定科目であり、教科書などがあるわけではないため、年間計画と共に科目設置の目的を含め科目のねらいについてのガイダンスを行った。

そして、今後生徒たち自身が活動していくこととなる地域福祉活動のひとつの例として、VTR「さなぎの食堂」を視聴させ、地域福祉活動とは何か、地域福祉活動の果たしている役割について考えさせた。

「さなぎの食堂」とは、横浜市寿町にある“NPO法人さなぎ達”が運営している安価で食事を提供している食堂であり、VTRは食堂に来る客と運営しているスタッフとの交流を映したドキュメンタリー映像である。「国が用意している福祉サービスは、社会的な合意ができているものである。しかし、社会的な合意がなくてもひとりひとりの尊厳を守るために必要なことがある。その地域に住む人たちが自身がその地域に合った方法で活動することで、社会のサービスでは届かない部分にアプローチしていく。これが地域福祉活動である。」というメッセージを伝えた。

・地域の福祉サポートネットワークを探す

PCを用いて、学校の周辺地域である坂戸市・鶴ヶ島市におけるインフォーマルな福祉活動を探し、ワークプリント【資料③】にまとめる活動を行った。

坂戸市も鶴ヶ島市も福祉活動が盛んに行われている。特に鶴ヶ島市は、社会福祉協議会がバックアップし、住民による小地域福祉活動が盛んである。学校周辺の地域福祉活動に目を向けさせ、今後の実際の活動につなげていくことをねらいとして取り組ませた。

・ゲストスピーカーによる講話

地域で活躍する計4組の団体と、視覚障がいがあり、盲導犬と地域で暮らしているAさんに講話をお願いした。

4組の団体のうち、2組は大学生が中心となって活動している団体、それ以外に被災地復興支援活動の団体、

地域住民による支えあい活動の団体を鶴ヶ島市社会福祉協議会の牧野さん（以下、鶴ヶ島社協：牧野さん）にコーディネートしていただき、講話が実現した。この4組の団体による講話では、各団体に活動をプレゼンしてもらい、その後、生徒が5～6人のグループに分かれ、そこへプレゼンをした各団体のメンバーも一緒に入り、「団体のすごいと思うところ」や「自分たちならどんな活動ができそうか」というテーマで話し合う活動を行った。

予想以上に生徒の反応が良く、講話と話し合いは盛り上がった。今までこの授業の中でどのように活動していけばよいか見当がつかない生徒にも活動についての具体的なイメージがわいたようである。特に若者によるボランティア団体ということで来てくれた大学生とは会話が弾んでいた。年齢の近さと気負わずに楽しみながら活動している姿が、活動を身近に感じさせボランティアのハードルを下げるきっかけになったようである。話しに来てくれた団体と早速連絡を取り、まずは見学から活動につなげていこうという生徒もあらわれた。

・グループ作りと活動計画作成

それまでの講義や講話、活動探しから得られた情報をもとに、自分の興味関心を見つめ整理させる時間をつくった。まずは、「高齢者」「子ども」「障がい」という大きなカテゴリーごとにまとめ、その中で話し合いながら自分の興味関心に近いところでグループを作っていくよう進めた。グループの人数に縛りは設けなかったため、最少人数は2名から多いところは7名でまとめ、全部で11のグループが出来上がった。【資料②】

活動計画作成においては、今後の活動を見通して企画書を作成することを課題として取り組ませた。企画書の項目には「取り組むべき（福祉的）課題は何か」「ニーズのある人は誰か」「ニーズ調査の結果わかったことは何か」など、その企画によって誰の役に立つかを明確にすること。独りよがりの活動ではなく、相手が何を求めているか（＝ニーズ）を把握し、それにどのくらい合わせて活動内容を考えられるかに重点をおくことを説明した。

・第1次報告会

初めて考えた活動案について、グループごとにパワーポイントを使い発表する形式で行った。聞く側には評価シートを用意した。

ゲストスピーカーで来てくれた団体等々に参加し、具体的に活動をしているグループもある一方で、グループを作成してから、日が浅いこともあり、ニーズ調査に苦

戦している様子が目立った。多くのグループが、相手は何を求めているかということについての調査や考察が浅く、生徒たちの思いこみの範囲にとどまっているグループも多くみられた。

この報告会には、コメンテーターとして鶴ヶ島社協：牧野さんにも同席してもらい、市内の地域福祉活動の支援を行っている社協の立場から専門的に助言していただいた。また、牧野さんの協力により、知人を介さないと難しいようなボランティア先にも、希望する生徒をつなげてもらうことができた。

<2学期>

2学期は、実際に活動すること、その活動から学んだこと・得たものを伝えるという内容が中心となった。

・夏休み明けグループ面談

夏休み明けてすぐの授業ではグループごとに面談を行い、進捗状況や報告会ではどのようなことを話すのかについて確認した。その際には、ただ確認や助言をするだけでなく、次の5つの項目を設け、面談内容を評価した。

「役割の分担など、それぞれが活動できているか」

「ニーズをふまえて企画のねらいや目的が考えられているか」

「活動内容」

「活動から得られたこと」

「自分たちの活動についてふりかえり、改善点やこれからの方向性について考えられているか」

3年生の夏休みという受験生にとって忙しいであろう時期にもかかわらず、自分たちで興味ある活動をしている団体と連絡を取り、積極的に活動に参加しているグループもみられた。その一方で、誰を対象としたいか、自分たちは何ができるか、何をしたいかわからないため、今後どのように進めていくべきかグループ内で悩んだまま、活動することができずに9月を迎えてしまったグループもあった。

・中間報告会

10月の初めに夏休みにどのような活動をしたかについて、パワーポイントを用いて発表を行った。前回の報告会と同様に評価シートを用意した。

活動に参加できたグループについては、何回か活動していく中で顔を覚えてもらい、信頼関係が構築されつつある様子がうかがえた。1学期に比べほとんどのグループが何らかの活動ができた、活動をしている人とふれあ

えた。次のステップとして、生徒たちがどのように活動に関わっていくかを考えさせるように導いていくことが、我々教員にとっての課題となった。

・グループ面談2学期2回目

中間報告会を受けて、今後の方向性についての確認や教員が気付いた点について助言した。また、3学期に行う最終報告会へ向けて、活動をふりかえり改めてニーズ把握について問い直した。

既成の団体に入って一緒に活動しているグループには、活動の意義を質問し、生徒達自身がその団体にどのように関わっていくかを考えさせた。また、団体にただ加わるのではなく、団体の運営する側としての視点で考えてみることを教員側からうながした。

生徒による持ち込み企画を既成の団体の活動に加えてもらい活動しているグループは、順調に進んでいるところが多かったので、授業の一環として取り組みのため教員へ適宜報告する等の必要性や引率等で教員側に関わらなければならない点などについて再度確認した。

全く活動ができていなかったグループは1つ、活動へ向けた会議等に参加でき、打ち合わせ等をしたが進められていないグループが2つあった。団体と意思の疎通が図れていないケースや3年の夏休みということでグループのメンバーの予定が合わずに過ぎてしまったケース、活動の意欲はあるものの高校生が入っていくためにはどのように進めていったらよいかわからず、相談もしないまま滞ってしまったケースであった。そのようなグループにとって、3学期に行う最終報告会は厳しいものであったが、活動できなくても自分たちで気付いたニーズを再考し、解決策やもしできればこのように関わってみたいかった、活動しなかったという方向性で準備を進めていくよう助言した。

・グループ面接試験

試験項目を大まかに予告し、今までの活動から学んだこと等を述べられるように準備するよう伝え、面接試験を行った。

試験官は担当教員2名、生徒は同じグループのメンバーがいないように組み合わせ、5名同時に行う集団面接形式をとった。質問項目は、

- ・授業のねらいを理解しているか
- ・グループ内で役割を担っているか
- ・活動したこと、それを通じて学んだこと
- ・活動の相手はどのような人か、その人のニーズは何か

- ・3学期の最終報告会の構想として何を考えているか
- ・地域活動の意味・意義は何か

の各項目についてそれぞれ5点、合計30点で評価した。

苦労して活動が続けることができている生徒は、上手に話せなくても学んだことについてわきあがってくるものがあるようで積極的な印象を受けた。面接形式なので緊張しすぎてしまい、いつもの面談のように話せなかったという生徒も何人かみられた。

＜3学期＞

報告会に加え、ふりかえりの一環として事例をもとにグループ討議を行い、1年の活動や学んだことを共有しあう活動を行った。

・最終報告会

発表は、パワーポイントを用いること、発表要旨を作成することとした。

発表時間を8分・質疑応答5分とこれまでより長く設け、2時間続きの授業であるが、2回（計4時間）の授業の中で行った。この報告会でもコメンテーターとして鶴ヶ島社協：牧野さんと、他にも生徒の活動に協力してくださった地域住民による支えあい活動の団体から代表で1名出席していただいた。

活動を報告するだけになってしまったグループもあれば、活動は全くできずにニーズを探りながらプランニングを発表するグループもあった。中にはニーズの背景となる点まで踏み込みながら、活動をふりかえることができたグループがいくつかあり、これまで2年次・3年次と積み重ねてきた学習の成果を感じられた。

発表内容に差が出たことについては、活動内容の充実による違いもあったが、教員のところへどれだけ生徒が自ら相談に来られたかの差があったように感じている。面談の機会を設け、フォローをしてきたつもりではいたが、次年度に向けて改善していきたい。

・グループ討議～事例から考える～【資料③】

最後の授業として、「地域で暮らす」をテーマに、“脳性麻痺の人が自立して地域で暮らすために、専門職ではないみなさん、地域の人はどうに関わることができるか・どのように関わりたいかを考えよう”というテーマで、まずは個人の意見、そして席が近くの人とグループを作り、その中で意見交換し、その後代表者が発表して共有していく形式で進めた。

生徒それぞれから出てくる意見はどれも気負ったものではなく、隣に住む一人としてさりげなくできることを意見として挙げていた。印象的だった言葉を挙げる。

- ・一方通行の支援でなく、互いに助けあえる関係に
- ・まず友達になり、さりげなく支援を
- ・助けを気軽に求められる環境作り…まずは挨拶から
- ・何でもかんでも手助けするのはNG
- ・おすそ分けをする
- ・障がいについて知る
- ・地域の行事をお知らせし、一緒に参加しようと誘う

4. 授業の成果

1) 最終授業のプリントより

一番最後の授業で配布したプリントに、授業のキーワードに関する問い（回答は自由記述）と、1年間の授業に対する意見を書き込む欄（自由記述）を設けた。その記述を紹介する。

1) -1 主体としてのあり方

「あなたは今後、地域の“主体”としてどのような関わり合いをしたいと思うか教えてください」という問いに対する回答では、下記の表のような結果になった。数字は回答数である。

主体としてどのように関わりたいか (複数回答可)	
あいさつ・会話・声かけ	25
気にかけるようにする	3
地域の行事や活動に参加 (例:資源回収など)	10
ボランティアを企画・参加していく	9
看護師に貢献したい	1
手話通訳士として地元に貢献したい	1
学んだことを広めたい	1
周りの人にも自分にできることを理解してもらう→意思疎通	1
できないことはできないと言う できることはやる 無理はしない	1
地域のことを知る	1
お互い様の意識をもつ	1
干渉しすぎない	1

さりげなくできることとして、多く挙がったのが「あいさつ・会話・声かけ」であった。行動として直接的に関わるわけではないが、気にかけるようにするという回答もあった。

積極的な関わりをしたいと思っている回答としては、「授業で行った企画を継続したい」というものや、もと

もとやっているボランティアを地域交流の大切さについて理解できたからこそ継続していきたいと回答したもの、その他には将来の夢(看護師や手話通訳士)と結びつけ、地域に貢献したいと考えている回答もあった。

積極的な関わりではなく、「自分たちの意識改革をまずする」という回答もいくつかあり、干渉しすぎないという記述にあらわれているような適度な距離感を大切にしつつ、知らないふりをしないなどの回答があった。

このプリントの記述が成績に入るかどうかというところで良く見せようとする回答も中にはあるだろうかと予想したが、生徒は1年間の活動をふまえ、よく考えており、背伸びしすぎ、気負わずに、これが細く長く地域の人々がつながっていく秘訣だということをよく理解できている様子が見えた。

1) - 2 「福祉」に対する考え方

「2年間福祉について学び、考えてきて、改めて“福祉”とは何だと思えますか」という問いに対する回答から、生徒の福祉観を探してみたい。このような問いは昨年度の「福祉入門」においても質問紙調査の中で尋ねてきた。昨年度の傾向としては、学期を追うごとに記述が具体的になる傾向があった。そして、我々教員がずっと伝え続けた「他人事ではない」ということは理解しているような記述が多かった。

今回の記述では、昨年度よりもさらに具体的な言葉が並んでいた。次のような表(数字は回答数である)に分類してみたところ、“すべての人に関わる”という記述が昨年よりもさらに具体的に実感をもって記述されていた。そして、その記述に“支え合う”という言葉が加わった。

福祉とは何か(重複記述もそれぞれに分類)	
すべての人の守られるべき生活の幸せ	15
暮らしを良くするもの・生活そのもの	8
みんなに関わる・ 支え合える社会づくり・ 共に生きる	14
地域に住んでいる人が過ごしやすくすること 地域づくり ※「地域」のキーワードが入っている	2
人とつながる・関わり	4
自分らしく生きるためにあるもの	1
思いやり・相手のことを考える	10
人の助けになること	1
人を理解すること	1
押しつけはだめ	1
なくてはならない	1
深い・よくわからない	3

生徒の記述をひとつ紹介する。

「“福祉”とは、“支えること”ではなく、“支え合う”ことだと思いました。この授業を受ける前までは、“私が支えてあげる・支援してあげなきゃ”と思っていました。でも“私たちが～してあげる”というのは違うと気が付きました。私たちも障がいのある人から学ぶことがあるし、支えてもらうこともあるということがわかりました。だから一方的にやるのではなく、互いに共有していくことが大切だと思いました。」

他にも昨年にはなかった語句として“生活”や“暮らし”というキーワードが目立った。“地域”という語句も2年次の「福祉入門」では出てこなかったキーワードである。

他に多かったのは“思いやり”や“相手のことを考える”というものである。福祉の最初の学習においても、福祉とは何かと尋ねると、よくこのような言葉を答える生徒は多い。しかし、それとは質が異なる印象を受ける。生徒の記述を紹介する。

生徒A:「(福祉とは) 思いやりをもって人とつながることだと思う。思いやりがないと支援できないし、つながれないと、その人が何を必要としているかも分からないと思うから」

生徒B:「福祉は、人の中にある思いやりとか、そういう気持ち、心、精神みたいなそういうものなのかなと思います。だから大きい人も、小さい人も、広い人も、限定的な人もいるわけで、差別をなくすっていうのは、そういう枠組みを広くするってことで。支援することを意欲的にするってことは、そういうのを大きくする。みたいなものだと思う」

生徒C:「(福祉とは) 思いやりだと思う。相手の立場になって考えることで、相手を理解することにつながるし、自分自身も成長できるものだと思う。福祉とは人と人が互いに助け合うことで成り立つものだった」

生徒D:「(福祉とは) 1人1人が意識して相手のことを考えることだと思います。障がいがある・ないに関わらず、困っている人がいたら、その人に何かできることはないか。自分に何かできることはないか。ということを考えることだと思いました」

生徒E:「ひとりひとりが相手を思いやって生活していくこと。障がいの有無、年齢など問わずに、お互いに助け合って良い関係を築き、幸せに暮らすこと」

思いやりを挙げた生徒の記述にあるように、“思いやり”だけでなく、その他のキーワードと重複して記述していることが特徴として挙げられる。そして、生徒が「福

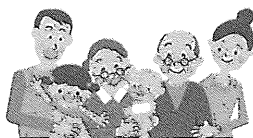
社からみた生活」の1年間の学習で“相手のニーズは何か”を一生懸命考え続けた結果が記述にあらわれているようにもうかがえる。

2) 高校生による高齢者と関わるサロンづくり

企画の対象者を高齢者と高校生と設定した「お年寄り」と話し隊」チームは、今回の授業の中で最も多く活動することができたグループである。鶴ヶ島社協：牧野さんや地域でサロンを運営している方にも協力していただき、既存の活動に参加しながら、そこへ持ち込みの企画を用意し、交流しながらサロン運営のノウハウを身につけた。

11月からは生徒自らが企画・運営するサロンを月に1回のペースで卒業する3月までの間、4回サロンを開くことができた。卒業してからは、それぞれの進学先・就職先で新しい生活が始まるため、2年生へ引き継ぎを考えている。以下は、その宣伝として2年生へのPRとして製作したスライドの一部である。

サロン 「ひだまり」



* チーム名 * お年寄りと話し隊

Q. サロン「ひだまり」とは？

“福祉から見た生活”の授業をきっかけに始まった

Q. ニーズとは？

「満たされていない状態」

私たちは…↓

“高齢者の
孤独死”

Q. 福祉のニーズとは？

“今社会や地域で求められている”こと

Q. なぜひだまりっていう名前なの？

意味⇒「日当たりがよくて暖かい場所」



お年寄りや若い人たちが一緒にいて
あったかい気持ちになれるような
場所を作りたい！

Q. 活動の狙い？

- ・WinWinな関係を作る
- ・生きがいのある場所にする



♪ 活動の様子 ♪



Q. どんな活動をしているのか？

☆ 月に1回

☆ 自分たちで企画を立てて交流してる

☆ 活動の内容 (一部)

→ ・ゲーム



- ・すいとん
- ・手巻き寿司
- ・チョコフォンデュ



次回予告

★日時: 3月8日(土) 13時30～

★場所: 富士見自治会館の隣

★活動内容: デコレーション写真たて

みんなに参加して
欲しいなあ



5. 課題と今後の展望

今年度は試行錯誤で進めていったため、改善すべきところは多い。改善していきたい点は2点ある。

1つ目は、授業目標と評価についてのガイダンスや面談を充実させることである。生徒の授業に対する意見には、今までにない授業形式にとまどった様子がよくあらわれていた。初めての授業であるために、活動の参考にできるような先輩もいない中、地域にある課題を探し、課題解決に向けて活動していくというのはとても高度な学習活動である。以前ならば2年次で『起業基礎』の授業を経験しているため、企画を立てて実行することに見通しが立ったかもしれない。しかしそのような経験をしたことのない生徒にとっては、一から何かを起こしていく・創り出していくということは、相当不安に感じたようである。そして、そのような不安な中、評価されることが相当なストレスだったようである。その不安を拭うべく教員が説明や面談を行い、フォローにあたってきたつもりでいたが、足りなかった。また、活動に参加できれば「5」なのかと尋ねてくる生徒も多かった。このような考査がなく、活動の成果を評価していくような授業においては、基準をより一層明確に示し、授業のねらいについても繰り返し説明していく配慮が必要であると反省した。次年度は初回のガイダンスだけでなく、途中にも評価に関するガイダンスを再度行い、併せて面談も充実させ、不明瞭な部分がないよう努めたい。

2つ目は、地域福祉活動や現在の地域福祉活動を取り巻く状況についての講義をより充実させ、知識の上で活動をバックアップすることである。他にも、交流の際に役立つようなゲームの作り方、コミュニケーションの取り方の秘訣など実践的な知識、交流相手の理解が深まるような学習を授業の中で行うことを盛り込んでいきたい。生徒たち自らが開拓することの不安を軽減し、活動が楽しみになるような工夫を心がけていく。

最後に今回のような授業は、鶴ヶ島社協：牧野さんの協力がなければ実現しなかった。そして、鶴ヶ島社協：牧野さんの呼びかけに快く応じてくださった地域の支え合い協議会の方々の協力もあって実現したものである。これらのことから、この授業の課題は、生徒が地域の実践者と出会えるようなコーディネートができるかどうかである。教員自身が地域とのつながりをつくることは当然必要となってくるが、社会福祉協議会のような地域福祉活動を支援している組織に協力してもらうことが不可欠である。

生徒からの厳しい意見ももらったが、授業がきっかけ

とはいえ、学校外で実践者と出会える経験は大きかったようである。大変だった分、成長できたと記述する生徒も多かった。今後もこの授業を改善し、より良いものにしていきたい。そして、筑坂でしか学べない福祉科目の充実に努めていきたい。

【資料②】活動内容一覧

企画内容	ニーズ対象者
夏の風物詩大作戦から子どもの縦のつながり作りについて考える	子ども(小学生)
坂戸拡大写本を広めよう	障がい(弱視の人)
障がいのある子とない子が一緒に遊ぶ場をつくる!!!	障がい・子ども・親
障がいのある子とない子の遊ぶ場作り～理解者を増やすために～	障がい・子ども
坂戸ろう学園の高校生とのより良い交流会を目指して	障がい(高校生)
子どもが思いっきり遊べる場づくり～プレーパーク～	子ども(小学生)
きょうだいに障がいのある子がいる友達を支える	子ども
作業所の活動を支援するPR方法	障がい・作業所のスタッフ
被災地支援～私たちにできること～	被災地
入院中の子どもと遊ぶボランティア	子ども
高校生サロン ひだまり	高齢者・若者

【資料①】授業計画表

	学習テーマ	学習形式
1 学期	地域福祉・地域福祉活動とは何か ・地域福祉活動の果たす役割 ・福祉サポートネットワーク ・ゲストスピーカーによる講話	講義
	活動へ向けて準備・ニーズを考える ・グループ作成 ・計画第1案(企画書)作成 ・グループ面談	調べる等 各自 フィールドワーク PPのスライド 作成
	第1次報告会	発表
	活動を見直す・経過を報告する ・グループ面談①	PPのスライド 作成
	中間報告会	発表
2 学期	活動を見直す ・ニーズとは何か改めて考える ・報告書作成 ・グループ面談② ・グループ面接試験	調べる等 各自 フィールド ワーク
	活動をふりかえる	発表要旨作成
	最終報告会 ・発表 ・ふりかえる(意見交換)	発表 グループ討議
	3 学期	

福祉からみた生活 年間ふりかえりプリント

3年 組 番 氏名

◆「地域で暮らす」

脳性マヒの障がいのある明石悟さん（26歳）は、地域で一人暮らしをしたいという意欲を語っている。「昔からなにひとつ、自分で決めることができなかった。朝起きてから夜寝るまで、母親が『あれをしろ。これをしろ。』とやって、ただそれとおりにしていただければよかった。でも、いつもこの先どうなるんだろって不安だった。これまで一緒に遊んでいた弟の成長がまぶしかった。いつのまにか弟のほうが僕よりも大人になって、立派になっていくことが怖かった。そのころから僕も自立して一人で生活してみたいと本気で思った。だれの人生でもない。自分で決めることのできる人生がほしかった。」

現在、明石さんは障害者自立支援センターを訪れ、自立するには、どうすればよいのかを模索する毎日である。覚えることは山ほどあり、やはり自分には無理なのではないかと不安にかられる日々が続いている。また、自立したいという彼の意欲を阻む障害物も多い。いちばん多いのは、地域の無理解である。彼がアパートを借りようとしても、貸してくれようとする理解ある家主は見つからない。また、支援センター―事態の活動がまだ地域の中で理解を得られていない。

☆彼が地域で生活していくために、福祉の専門職ではない地域のひととはどのような関わりができるでしょうか。特にもしあなたの住んでいる近くに彼が住んでいた、または何かのきっかけで彼と出会ったとしたらあなたはどのような関わりをしたいでしょうか？

<p>あなたの意見</p>	<p>グループのメンバーの意見</p>
<p>グループでまとめた意見</p>	

【資料④】 活動の様子



流しそうめん&映写会の企画に参加



プレーパークでの様子



お年寄りと話し隊による「サロン：ひだまり」写真立てのデコレーション



お年寄りと話し隊によるゲーム企画&カラオケ大会



手巻き寿司企画での様子